「羅生門」の文体について

方江英

はじめに

初めて芥川龍之介の小説を読んだのは大学三年生の時である。「杜子春」という本であった。昔昔の出来事であったが、中国をその舞台にしているから、親しい感じがあった。その文章に魅了されて、芥川の小説を愛読するようになった。今度文体論についての文章を書くにはさっそく芥川龍之介の小説にした。

今度文体論的なことをするに際して、芥川龍之介の「歴史小説」の最初の作である「羅生門」という小説にした。周知のように「羅生門」は芥川が柳川隆之介の筆名で、大正四年十一月の「帝国文学」に発表した作品であり、後第一短篇集の総題となった。その材源は「今昔物語」の本朝編二九の第十八話の「羅生門登上層見死人盗人語」である。一つの文章から作者の文体の特色を全部見出すことはちょっと無理であるが、その大体がうかがわれると思う。本稿でも「羅生門」という文章の文体研究から作者の芥川龍之介の文体の特色について少し触れたいと思う。

平俗な比喩

「羅生門」を読むとき、一番先に気が付いたのはその比喩であろう。比喩は他の修辞法と違い、文体の個性面を研究するには非常に役立つものである。周知のように、耽美主義者の島崎潤一郎にはいつも「絵の島の海辺で獲れる薄紅色の貝にも劣らぬ爪の色合、珠のような踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗ふかと疑われる皮膚の潤沢」などのような絵のような、歌のような美文が出てくる。芸術至上主義者の芥川龍之介の比喩はどういう特色を持っているのだろうか。

▲　羅生門の楼の上へ出る、幅の広い梯子の中段に、一人の男が猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。

▲　そうして、その死骸は皆、それが、かつて、生きていた人間だという事実さえ疑われるほど、土をこねて作った人形のように、口を開いたり、手をのばしたりして、ごろごろ床のうえに転がっていた。

▲　ちょうど、鶏の足のような骨と皮ばかりの腕である。

▲　その時、その喉から、鳥の鳴くような声が喘ぎながら、下人の耳へ伝わってきた。

(2)

▲　それから、今まで眺めていた死骸の首に両手をかけると、丁度猿の親が猿の子の虱をとるように、その長い髪の毛を一本ずつ抜き始めた。

▲　眦の赤くなった、肉食鳥のような鋭い眼で見たのである。

上の例を見ても分かるように、芥川は読者をがっかりさせるほどごく普通、なみたいていの比喩を使っているようである。人形にしろ、鶏の足にしろ、烏の声にしろ、ちっとも奇抜的、清新的なイメージを与えてくれない。こういう特徴について、小林英夫氏に「あれほど俗流を排したこの作家が比喩に使い方において、結局平常人の常識以上に出ない。というややマイナスの評価がある。これは芥川龍之介は知的作家で、その比喩は生々しい実感に支えられて作られたのではなく、頭で作り上げたからである。「鶏の足のような腕「烏の鳴くようなこえ」、「肉食鳥のような」など、体臭に乏しい比喩は体の一部分の形容でありながら、かえって老婆の姿を一層克明にする実際の効果を達した。こういう結果になったのは作者が文章を実感に頼らずに、頭で作り上げ、制御意識の強さにかかわっていると思う。

絵画的描写

◆芸術は表現に始まって、表現に終わる。　「芸術その他」

◆文芸は文章に表現を託する芸術なり、従って、文章を鍛練するは勿論小説家は怠るべからず、若し一つの言葉の美しさに恍惚たること能はざるものは小説家たる資格のうえに多少の欠点ありと覚悟すべし。　「小説作法十則」

以上の芸術観から芥川龍之介が理知的作家で、芸術至上主義を極端的に尊奉する姿勢がのぞかれる。小林英夫氏に「芥川の文章が絵画的であり、さらに細分すれば、線画的である」という論定がある。材源の「羅生門登上層見死人盗人語」が枯山水と評されるほどの素朴単純な筋であるに対して、「羅生門」の冒頭の第二段を挙げてみよう。

▲　広い門の下にはこの男の外に、誰もいない。唯、所々、丹塗の剥げた、大きな円柱に蟋蟀が一匹とまっている。羅生門が、朱雀大街にある以上は、この男の外にも、雨止みをする市女笠や揉烏帽子がもう二三人はありそうなものである。それが、この男の外には誰もいない。

この一段落の骨組みは実は非常に簡単な説明的な文章である。この一段落だけでなく、次の三、四、五段落も同じく説明的な骨組みである。但し、作者の芥川龍之介はこういう説明的な叙述には絵画的な描写を織り込んでいる。「丹塗の剥げた、大きな円柱に蟋蟀が

一匹とまっている」の鮮明な描写は「蟋蟀」という極小の像を大写しにして、円柱や雨の降る中の羅生門を明瞭に、鮮烈に描き上げる。「蟋蟀」はまた静寂な雰囲気と寂寥感を作り上げた。「この男の外にも雨止みをする市女笠や揉烏帽子がもう二三人はありそうなものである。」はその時代の風俗、情趣を示し、その真実味を肯定した。これは理想主義者の志賀直哉と全く対照的である。志賀直哉は視点の細工もせず、事と心の自然の動きを書いて、色彩語や比喩も多用せず、描写による画面づくりそのものがまったくないのに、鮮やかな像が浮かび上がってしまうのである。こういう食違いは志賀直哉の芥川への批判からよくうかがわれる。

▲ しかも肩とか胸とかの高くなっている部分に、ぼんやりした火の光を受けて、低くなっている部分の影を一層暗くしながら、永久に唖のごとく黙っていた。
▲ そうして、そこから、短い白髪を逆さまにして、門の下を覗き込んだ。
▲ 檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のような老婆である。

客観的に観察して描写することは視覚的効果が達せる。作者の芥川龍之介は視覚的描写を思い起すには相当の苦心を払っている。周知のように、「羅生門」の制作のため、芥川は大正三年三月の人体解剖見学をしたようである。こういう苦心の末、死体も老婆の描写も寥々たる数句の描写であるが、克明に読者の目の前に浮かび上がらせて、作者の芥川の抜群な腕前を感心しないわけにはいかないだろう。芥川龍之介は又小道具の使いにも細心の工夫が凝らしある。それによって、人物、風景が鮮明に浮かび上がると共に人間の心の動きまで現わせる。

▲ 下人は七段ある石段の一番上の段に、洗いざらした紺の襖の尻を据えて、右の頬にできた、大きなにきびを気にしながら、ぼんやり雨の降るのを眺めていた。
▲ 丹塗りの柱にとまっていた蟋蟀ももうどこかへ行ってしまった。

要するに、作者の芥川龍之介は修飾の要素を多く使って人工的ながらも磨き上げられた芸術美が出来上がるようになった。そういう結果はやはりまず、構図を決定してから、その構図を現実化して、美的効果を挙げるように芸術的努力を払うという芥川龍之介の創作過程にかかわっていると思う。

断定的表現

この前も言ったが、芥川龍之介は知性的作家で、作品は真っすぐに見て書くのでなく、頭のなかで整理して表現したのである。それゆえに、作者の制御的性格はよく文面に現わ

れる。「羅生門」の中で一番はなはだしいのは「作者が顔を出す」ことである。

▲ 作者はさっき「下人が雨やみを待っていた」と書いた。しかし、下人は雨が止んでも、格別どうしようという当てはない、ふだんなら、もちろん、主人の家へ帰るべき筈である。ところが、その主人からは四五日前に暇を出された。前にも書いたように、当時京都の町は一通りならず衰微していた。今この下人は長年、使われていた主人から暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波にほかならない、「下人が雨やみをを待っていた」というよりも、「雨に降りこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれていた」というほうが、適当である。

▲ 旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、道端に積み重ねて、薪の料に売っていたということである。

▲ いや、この老婆に対するといっては、語弊があるかもしれない、むしろ、あらゆる悪に対する反感が、一分ごとに強さを増してきたのである。

この三つの例から、作者の芥川龍之介の顔がはっきり見られる。例えば、中の例は「旧記」からの「引用」であるが、それは芥川が読者に直接にこの事件の背景を語っているのである。

小林英夫氏は芥川の筆癖に「もちろん」型、「違いない」型、「言うまでもない」型などがあり、「それはいずれも事実の確認を強調するものであって、他人にゆび一本指させまいとする自信の強さを示している」と語っている。「羅生門」という文章に「もちろん」型の文が六つあり、「ばかり」型の文が七つ、このほかの断定的表現もいくつかある。

▲ もちろんなぜ老婆が死人の髪の毛を抜くか分からなかった。

▲ もちろん右の手では赤く頬に膿を持った大きなにきびを気にしながら聞いているのである。

▲ 選んでいれば、築土の下か、道端の土の上で、飢え死にするばかりである。

▲ 外にはただ黒洞洞たる夜があるばかりである。

▲ 今この下人が長年使われていた主人から、暇を出されたのも、実はこの衰微の小さな余波のほかならない。

▲ 老婆が驚いたのは言うまでもない。

以上のいずれの例にも、作者の芥川龍之介の視覚が潜んでいる。例えば、「もちろん」は論理的必然性を強調するが、「羅生門」には芥川の予想以外に何も不可能だというコントロールの思想がうかがえる。これもやはり、芥川龍之介の統御、制御の働きがその根底に働き掛けているにかかわりがあると思う。

結び

芥川龍之介の「羅生門」の文体の特色は以上述べたほかに、「歴史的現在」の使用、「接続詞」の使い方の特色など、まだいろいろある。そのどちらを分析しても、「羅生門」の表現を特徴づけるのは統御的性格だという結論を出すことが出来ると思う。「羅生門」の文体分析から、芥川龍之介が理知的作家で、芸術至上主義者である様態が覗けるだろう。